ネパールの都市部における高齢者の居住空間のあり方に関する研究

ー市街部の新旧住宅類型でみた高齢者の居住様態とその空間構造ー

主査　上野勝代*1
委員　藤本尚久*2，蔵田力*3，サキャ　ラタ*4

本研究はネパールの都市部の伝統型住宅街と新型住宅街における高齢者の生活と居住空間の実態から、その変化と評価すべき点ならびに改善すべき点を明らかにし、住宅計画上の課題を明確にするものである。主な成果は以下の通りである。1)高齢者の一日は巡拝で始まり、昼は家族および孫と過ごし、夕方は近所と談話しながら過ごす。この生活は多世代との交流が豊富で孤独を感じさせない生活であり、スピリチュアルライフといえる。2)新型住宅街では伝統型が有していた住宅内の立体的空間構成や外部の広場がなくなってきており、高齢者にとっては自宅内での日常生活行為は行いやすくなっているが、自宅外で過ごす居場所がなくなるなどの生活の質が制限されてきている。

キーワード：1）ネパール，2）都市部の高齢者，3）伝統型住宅街，4）新型住宅街，5）居住実態，6）一日の過ごし方，7）居場所，8）介助・介護，9）信仰的な行動，10）スピリチュアルライフ

A RESEARCH OF LIVING SPACE FOR ELDERLY PEOPLE IN URBAN AREA OF NEPAL

—An aspect of Elderly People's Living Style & its spatial structure in respect of New and Old Residential Types—

Ch.　Ueno　Katsuyo
Mem.　Fujimoto　Naohisa，　Kurata　Tutomu　and　Shakya　Lata

The purpose of this study is to clarify spatial structure of urban elderly's daily life of Nepal by a comparative analysis between traditional (old) and new residential areas. The findings are as follows.1) Elderly's daily life begins by visiting shrines & praying, and at day time spends with family, grandchild & neighbors. This life style is out of loneliness that can be called Spiritual life. 2) The spatial structure in new residential areas are changing from a traditional system, to a new structure which is convenient for daily life activities but which lacks space for social contact and this results in limitations on the quality of life of elderly.

1. 研究の背景—ネパールの近代化と都市生活の概要

ネパールは2001年国勢調査において高齢者率（60歳以上の高齢者）は総人口（2200万）の6.5%であり、今後も増え続け、2011年には6.94%と高齢化社会になることが予測されている。また、平均寿命が1960年代の39歳から現在60歳となっている[文1)]こと、全人口の増加率（2.3%）より高齢者増加率(3.79%)の方が上回っていること、さらに70歳以上の高齢者の増加が著しいことからも、今後、人口問題が深刻化することは避けられない状況にある[文2)]。

高齢者を対象とした研究としては、NEPAN[注1)]とH.N.[注2)]による農村部の15郡を対象とした研究やCWDC[注3)]の都市部を対象とした研究では、経済的貧困の状態や家族との関係が課題とされている[文3)4)]。UNESCAP[注4)]による調査報告では全国高齢者の事情をまとめているが、高齢者の居住空間については調査されていない[文5)]。また、ネワール族の居住空間構成に関する研究としては、黒川らのハディガウンの空間構成（1998）についての研究[文6)]がある。この研究ではネワール族の住宅内での空間構成だけではなく、外部空間の路地などについても考察されている。しかし、高齢者の居住空間という視点からは考察されていない。

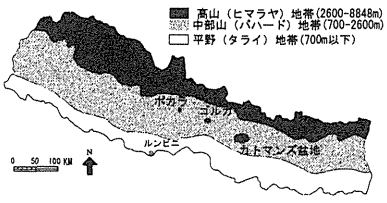


図 1-1　ネパール全体図

ネパールの標高は60m～8,848mに分布し、南部は亜熱帯のタライ地帯、中部は温帯の山間地帯、北部は寒帯のヒマラヤ高山地帯と地域条件の差異が大きい(図 1-1)。また、地帯によって独特な文化をもつ民族の種類も異なり、住居の様相も異なっている。都市部の首都圏カトマンズ盆地は

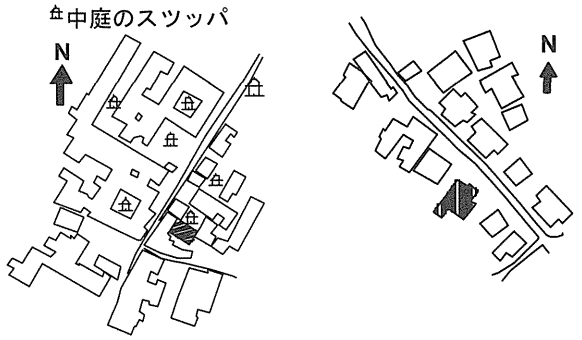
*1 京都府立大学　教授
*2 地域・建築プランニング＆デザイン室　主宰
*3 （有）地域にねざす設計舎ＴＡＰＲＯＯＴ　取締役
*4 京都府立大学大学院　博士前期課程

4,5 階建ての煉瓦造住宅が主体であり、その空間構成も主な住民ネワール族の観念による、上階ほど浄、下階ほど不浄という（1 階便所、2･3 階寝室、4 階台所・食事室）独特なものである。

また、町は中庭のある仏教僧院、中庭のまわりに仏教寺院と住宅が棟続きになっているところ、住宅群が中庭を囲んで建っているところがあり、それらが狭い道路(街路)に沿って、順次連なりながら街区をなしているところである。このように歴史的そして伝統的な空間構成によってできている住宅街を「伝統型住宅街」ということができる。

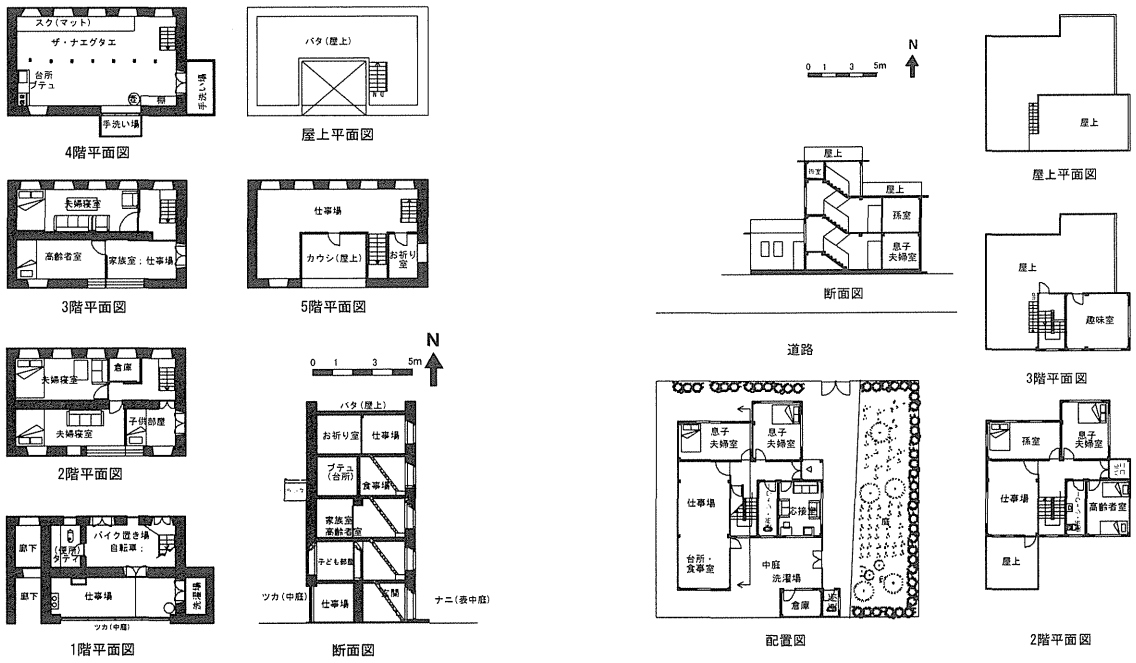
しかし、近代化が進む都市部は人口流入も多く、その密度も高い。市街地辺縁部では新住宅街が開発され、その空間構成は、中心部のような細い 4～6 階建てでなく、横に広がりのある 2･3 階建てで、同じ階に L と DK や、L と D と K を隣り合わせてつくる欧米式に似たものや、階毎に住戸が完結して、別の世帯がそれぞれ入るようなフラット形式の集合住宅が多くなっている。このように新しく地域で建てられた独立的な新築住宅が並ぶ、新開発された住宅街のことは「新型住宅街」といえる。図 1-2,1-3,1-4 は伝統型と新型の代表的な事例である。伝統型住宅では立体的空間構成であるため高齢者の移動が多いのに対して、新型住宅では移動が少なく、高齢者にとっては便利であると推定できるが、一方で伝統型住宅における中庭式や宗教的空間など豊かな空間によるプラス面も予測できる。

このような近代化に伴って、高齢者の居住空間も影響を



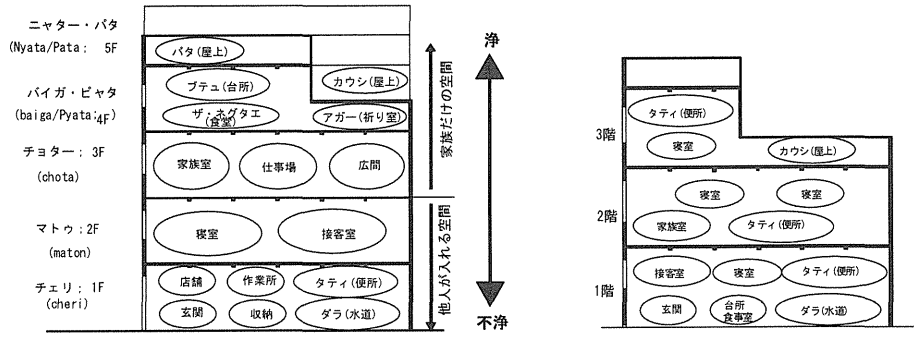
＜伝統型住宅街＞　＜新型住宅街＞

図 1-2 新旧型住宅街区図と事例図面対象住宅位置（黒塗り部）



＜伝統型住宅＞　＜新型住宅＞

図 1-3　新旧住宅事例の略図面(配置･平面･断面図、但し旧型配置図省略)



＜伝統型住宅＞　＜新型住宅＞

図 1-4　新旧住宅の基本的空間構成のモデル図

受けており、高齢者にとっての安心そして安全に過ごすことができる居住空間のあり方が問われている。

2. 研究目的と方法

本研究の最終目的はネパールにおける高齢者居住空間整備のあり方を構築することであるが、そのために、本報では近代化により変化しつつある都市部の積層型住宅街区と辺縁部一帯を対象に 1) ネパールにおける高齢者世帯内での基礎的データである世帯の構成と居住形態、ライフスタイル、意識を明らかにすること 2) 高齢者居住の空間的な様相の枠組みを明確化すること 3)新旧住宅類型を比較することによって変化の様相について考察することである。

研究方法（表 2-1）としてはまず、2003 年 3 月に都市部における典型的な高齢者の居住実態と生活行動についての事例調査（調査Ⅰ）を実施した。次にネパールにおける高齢者の事情および政策を検討するために関係者へのヒアリングと資料収集を行った（調査Ⅱ）。ついで、都市部パタン市の第 22 地区の 65 歳以上の高齢者を対象にアンケート調査を行い、全般的な生活様態を明らかにする（調査Ⅲ）。また、家族構成、身体状況による類型化を行い、典型的世帯を対象に訪問ヒアリング調査ならびに住み方調査を行い、高齢者の詳細な日常行動について分析する（調査Ⅳ）。さらに、高齢者の地域におけるコミュニケーションの実態についてもヒアリング調査より明らかにする（調査Ⅴ）。加えて現地観察・資料分析により家屋・街路などのハード面での高齢者居住空間の整備の課題について考察を行う[注5)]（調査Ⅵ）。

3. ネパールにおける社会福祉と高齢者施策の実態（調査Ⅱ）

高齢者政策としては 1996 年からの 75 歳以上の高齢者を対象とした補助金[注6)]の給付が初めての取り組みである。その後、1997 年には「第 9 回社会サービスと保障 5 ヵ年計画（1997～2002）」[注7)]に初めて高齢者の課題が取り入れられた。1999 年からは高齢者問題をテーマとした国際会議[注8)]に参加することになり、「第 2 回マドリード高齢者問題世界会議」から多くのことを学び、その内容をネパールの高齢者政策で参考にした。そして、2002 年には「Senior Citizens Policy and Working Policy 2002」が施行された。このように 90 年代後半から高齢者問題にも注目するようになり、ようやく政策として動きだした状態である。しかし、貧困国のまま高齢化社会を迎えることになるため、将来、社会的に大きな問題となるといえる[文7)8)]。

4. 都市部高齢者の居住実態（調査Ⅲ，Ⅳ，Ⅴ）

4.1. 調査対象地域と調査方法

調査対象地域パタン市の第 22 地区[注9)]は、南部には伝統的な住宅が並ぶ伝統型住宅街（旧型、以下伝統型と略する）があり、北部には新築住宅があらわれ、新型住宅街（以下新型と略する）が生まれつつあるという対照的な住宅様式が見られる地域である。そのため、この地域は今後の変容を考える上では比較調査対象として適切であるといえる。

表 2-1　研究方法

調査Ⅰ（先行調査）	方法：少数（典型）高齢者生活行動調査（4タイプの事例） 時期：2003年3月
調査Ⅱ（文献調査・資料収集）	方法：現地の政府機関・非政府組織での文献調査と関係者を対象にインタービュ調査 時期：2005年3月
調査Ⅲ（アンケート調査）	方法：調査員による面接調査 回収数：271人（選挙名簿には高齢者数390人、回収率69.5%） 内容：高齢者基本属性、仕事状況、家族構成、自立度、住まい暦、住宅の種類・特徴、高齢者室の特徴、住環境の評価過ごし方、近所づきあい、外出行動不安感、娯楽感、生活全体評価、希望するサービス 時期：2005年8月
調査Ⅳ（訪問ヒアリング調査）	方法：同別居、単身・夫婦、ADLという三つの視点から23件典型事例を選択し、日常生活行動についてのヒアリング調査事例高齢者の一日の生活を観察調査 時期：2005年9月、2006年8月
調査Ⅴ（訪問ヒアリング調査）	方法：伝統型住宅街の集まり場において、集まる高齢者を対象にヒアリング調査 時期：2006年8月
調査Ⅵ（観察調査）	方法：現地の建築専門家とのミニカンファレンスの実施と意見交換都心街区・辺縁部・郊外・農村部の住宅建設事情の現地観察 時期：2005年8月

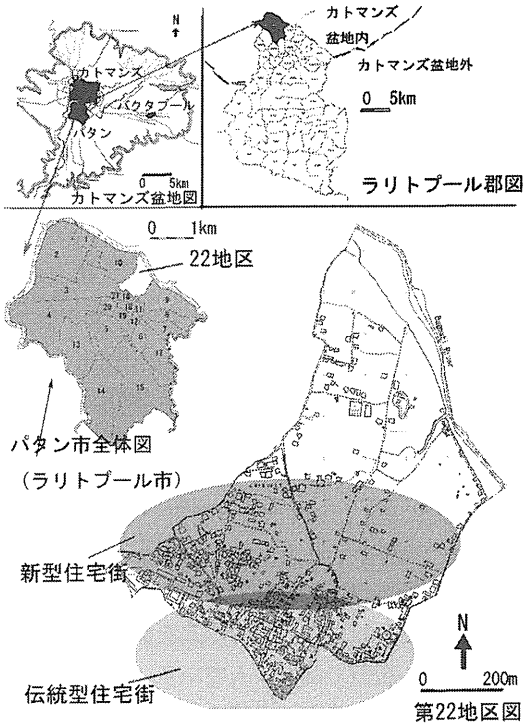


図 4-1　カトマンズ盆地、パタン市、第 22 地区

調査方法としては以下の通り 3 段階 3 種類において行った。

1) 2005 年 8～9 月に、新旧住宅地区における高齢者の全般的な居住実態を把握するために 65 歳以上の高齢者を対象に調査員による面接アンケート調査（調査Ⅲ）[注10)] を行った。調査対象者は表 4-1 のとおり 271 人（伝統型 210 人、新型 61 人）である。

2) 2005 年 9 月、2006 年 8 月に新旧住宅地における高齢者の日常生活行動を把握するために主たる類型についての高齢者世帯を対象に訪問聞き取り調査(調査Ⅳ) を行った。調査対象事例は 23 件で、夫婦は 9 組、未婚高齢者は 2 人で、

その他は配偶者と死別した高齢者である。また、調査対象を同別居、単身・夫婦、ADL（元気、部分介助、寝たきり）の状況から 13 に類型化(頭文字を組み合わせて表記)できる（表 4-2)。

3) 2006 年 8 月に伝統型住宅街の事例高齢者の一日の生活移動を観察し、スピリチュアルライフであることを把握した。また、2 つの集まり場においてヒアリング調査（調査Ⅴ）を行い地域での交流について把握した。

4. 2. 基本属性

居住形式としては、持家が伝統型で 97.7%、新型でも 91.8%と圧倒的に持家居住が多い。居住年数は伝統型では「50 年以上前」が 54%占めており、新型では最近 10 年以内に新しく住みついた世帯が約半数ある(表 4-3) 。

高齢者の健康状態としては「どちらでもない」が両住宅街ともに多いが、「毎日寝込んでいる」と答えた高齢者は伝統型では 7.5%と新型の 4.8%よりやや多い。ADL については「不自由なし」が伝統型では 69.5%と新型の 47.5%より明らかに多い。部分介助および全体介助の必要な高齢者も新型に多いことを示している。

経済状況については伝統型では「困っている」、「少し困っている」が 37.2%と新型の 32.8%よりやや多い。「困らない」、「あまり困っていない」が伝統型では 60.5%に対して新型では 65.5%とやや多く、新型の経済条件が上位にあることが反映しているといえる（表 4-3)。

4. 3 家族の中の高齢者

家族構成としてはまず、同居と別居にわけ、同居をまた 3 世代世帯、4 世代世帯、未婚子同居、親戚同居に、別居は子家族有り・無しに加えて、単身・夫婦に分類した。また、娘によるサポートも大きいため、各世帯を娘家族にも分類した。調査の結果、伝統型（77%)、新型(69%)ともに 3 世代世帯が圧倒的に多く、別居世帯は新型では 7.6%に対して伝統型は 9%とやや多いことが明らかになった。伝統型では別居の単身高齢者が 4%と新型の 1.9%より多かった(表 4-4)。また、食事を一緒にとっている家族数は平均値が伝統型では 8.8 人で、新型では 8.6 人であり、大家族で住むことを示しているが、1～2 人で食事する世帯が伝統型では 16.6%あり（新型では 4.9%)、同居であっても伝統型では食事分離という形態もあることがわかる。経済サポートについては調査Ⅲでは「息子」と答えた高齢者が伝統型、新型両方とも 60%であり、介護サポートについても同じく「息子」と答えた高齢者が伝統型では 55%、新型では 56%、「嫁」は伝統型では 46%、新型では 40%である。また、娘と答えた高齢者は伝統型では 42%、新型では 23. 3%であり、娘からの介護サポートもかなり見られた。これはネワール族において身近な街区内での結婚が多いため結婚後の娘の婚家先までの距離が短く、娘が頻繁に実家に通う習慣があるためだと考えられる。このことは、別居子家族との距離を示す図 4-2 からも読み取れる。別居の娘家族との距離は伝統型では「歩いて 20～30 分」と「同じ市内」が最も多く、新型では「歩いて 20～30 分」と「市外」が多いことを示している。また、別居の息子家族の場合も距離が短いことが特徴的である（図 4-3)。距離としては同じ建物（隣居・

表 4-1　アンケート調査対象者属性（調査Ⅲ）

	伝統型住宅街		新型住宅街		合計
回答者	210		61		271
平均年齢	73.5		72.4		73.2
	男性	女性	男性	女性	合計
65-74歳	54	76	18	24	172(63%)
75歳以上	29	51	8	11	99(37%)
合計	83	127	26	35	271(100%)

表 4-2　訪問聞き取り調査対象者属性（調査Ⅳ）

	事例No.	年齢	性別	同別居	ADL	住宅建設年	階数	住宅種類 持家	住宅種類 貸家	同居家族	類型別
伝統型住宅街	1	75	女	同居	寝	50年	5階	○		5人	DTN
	2[A]	88	男	同居	部	50年	6階	○		11人	DTB
	3[C]	88	女	同居	部	50年	5階	○		5人	DFB
	4[D]	73	女	同居	元	10～20年	6階	○		5人	DTG
	5	80(71)	男(女)	同居	寝(元)	50年	4階	○		7人	DFN
	6	75(71)	男(女)	同居	元(元)	30～50年	4階	○		8人	DFG
	7	65	女	別居●	元	30～50年	6階	○		1人	BTG
	8	73(70)	男(女)	別居	元(元)	10～20年	4階	○		2人	BFG
	9	79(76)	男(女)	別居	部(元)	50年	4階	○		2人	BFB
	10	75	男	未＋同	元	50年	4階	○		2人	MTG
	11[B]	94	男	未＋同	寝	50年	4階	○		2人	MTN
	12	67	女	親＋同	元	50年	5階	○		7人	STG
新型住宅街	13	93	女	同居	寝	10～20年	4階	○		10人	DTN
	14	83	女	同居	部	10～20年	3階	○		6人	DTB
	15	80	女	同居	部	2年	4階		○*	6人	DTB
	16	70	女	同居	元	1年	3階		○*	4人	DTG
	17	68(67)	男(女)	同居	元(寝)	1年	4階	○		6人	DFN
	18	70(68)	男(女)	同居	元(元)	10～20年	3階	○		13人	DFG
	19	72(65)	男(女)	同居	元(元)	2年	4階	○		10人	DFG
	20※	65	女	別居	元	30年	3階	○		1人	BTG
	21※	70	男	親＋同	元	10～20年	4階	○		12人	STG
	22	77(68)	男(女)	未＋同	寝(元)	6～10年	1階	○		6人	MFN
	23	65(65)	男(女)	未＋同	部(元)	10～20年	4階	○		3人	MFB

註: 番号⇒※: 未婚高齢者 [ ] :先行調査の事例no.表示
年齢・ADL⇒ ( ) : 妻について
同居⇒未＋同: 未婚子＋同居、親＋同: 親戚＋同居、別居●: 食事分離型
ADL⇒寝: 寝たきり、部: 部分介助、元: 元気
住宅種類⇒○＊:フラット賃貸
類型別⇒「同居:D、別居:B、未婚子同居:M、親戚同居:S」
「単身:T、夫婦:F」、「寝たきり:N、部分介助:B、元気:G」

表 4-3　居住形態・自立度（調査Ⅲ）

項目			伝統型住宅街	新型住宅街	合計
居住形式	持家	自分	191(91%)	47(77%)	238(87.8%)
		子世帯	8(3.8%)	5(8.2%)	13(4.8%)
		親戚	6(2.9%)	4(6.6%)	10(3.7%)
	借家	一戸建て	3(1.4%)	0	3(1.1%)
		フラット式	0	3(4.9%)	3(1.1%)
		1＆2つの部屋	1(0.5%)	1(1.6%)	2(0.7%)
	その他		0	1(1.6%)	1(0.4%)
	無回答		1(0.5%)	0	1(0.4%)
居住年数	今年		4(1.9%)	10(16.4%)	14(5.2%)
	2～5年前		16(7.6%)	9(14.8%)	25(9.2%)
	6～10年前		10(4.8%)	12(19.7%)	22(8.1%)
	11～20年前		12(5.7%)	14(23%)	26(9.6%)
	21～30年前		28(13.3%)	4(6.6%)	32(11.8%)
	31～40年前		26(12.4%)	2(3.3%)	28(10.3%)
	50年以上前		114(54.3%)	10(16.4%)	124(45.8%)
健康状況	大変健康		30(14.8%)	14(23%)	44(16.2%)
	どちらでもない		113(53.8%)	26(42.6%)	139(51.3%)
	病気がち		50(23.8%)	18(29.5%)	68(25.1%)
	毎日寝込んでい		16(7.5%)	3(4.8%)	19(7.1%)
	無回答		1(0.5%)	0.0	1(0.4%)
自立度	不自由なし		146(69.5%)	29(47.5%)	175(64.6%)
	どちらでもない		23(11%)	7(11.5%)	30(11.1%)
	部分介助		26(12.4%)	17(27.9%)	43(15.9%)
	全体介助		14(6.7%)	8(13.1%)	22(8.1%)
	無回答		1(0.5%)	0.0	1(0.4%)
経済状況	困っている		23(11%)	8(13.1%)	30(11.4%)
	少し困っている		55(26.2%)	12(19.7%)	67(24.7%)
	あまり困ってい		83(39.5%)	19(31.1%)	102(37.6%)
	困らない		44(21.0%)	21(34.4%)	65(24.0%)
	無回答		5(2.4%)	1(0.6)	6(2.2%)

表 4-4　同居・別居の世帯実態（調査Ⅲ）

世帯種		新型住宅街	伝統型住宅街	合計
同居	3世代世帯	41(77.4%)	141(69.5%)	182(71.1%)
	3世代（娘家族）	0	3(1.5%)	3(1.2%)
	4世代世帯	2(3.8%)	17(8.4%)	19(7.4%)
	2世代世帯	2(3.8%)	9(4.4%)	11(4.3%)
	娘との2世代	2(3.8%)	6(3%)	8(3.1%)
	親戚＋同居	2(3.8%)	9(4.4%)	11(4.3%)
別居	単身（別居息子家族あり）	0	4(2%)	4(1.6%)
	夫婦（別居息子家族あり）	1(1.9%)	6(3%)	7(2.7%)
	単身（別居娘家族あり）	0	2(1%)	2(0.8%)
	夫婦（別居娘家族あり）	2(3.8%)	0	2(0.8%)
	単身（子家族なし）	1(1.9%)	2(1%)	3(1.2%)
	夫婦（子家族なし）	0	4(2%)	4(1.6%)

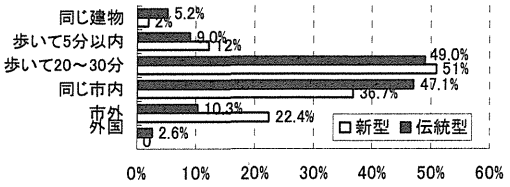


図 4-2　別居娘家族との距離（調査Ⅲ）

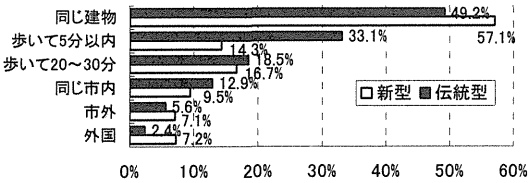


図 4-3　別居息子家族との距離（調査Ⅲ）

食事分離型）が伝統型では 49%、新型では 57%と最も多い。これは同居でも食事分離型であり、複数世帯の同居による家族関係がうまくいっていない状態の現れであると同時に、完全に別居していないため高齢者においては何らかのサポートが受けられる状態であるともいえる。また、完全別居でも「市外」は新旧ともに少なく、これもネワール族の独特な習慣によるものである。

4.4 空間の構造とスピリチュアル・ライフ

1) 住宅の家屋条件

調査Ⅲでは住宅の建てられた時期は 1933 年[注11)]以前のものが伝統型では多い（30%）が、新型では 1985 年以降に建てられた住宅が多い。住宅の階数をみると、伝統型では 4 階建て以上の割合が高いのに対して新型では 2～3 階建てが 75%と多い(表 4-5)。これは洋風の住宅が多いことによる。構造は全体的に、建てられた時代とともに変化し、1975 年からは急速に煉瓦＋鉄筋コンクリート造が増え、現在はほとんどこの構造となっている(図 4-4)。また、伝統型の住宅の 75.7%が組積煉瓦造で、新型は 77%が煉瓦＋鉄筋コンクリート造という点でも差異がある。

2) 生活空間構成の変化

調査Ⅲでは、伝統型と新型を比較して分析した。上階・下階の浄・不浄の考えや火を使う場所を上階に置く伝統的慣習についての変化が読める[注12)]。トイレが伝統型の 1 階 78%に対して、新型では 1 階を離れて 2～3 階にあるのが

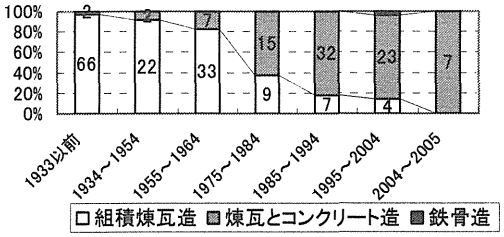
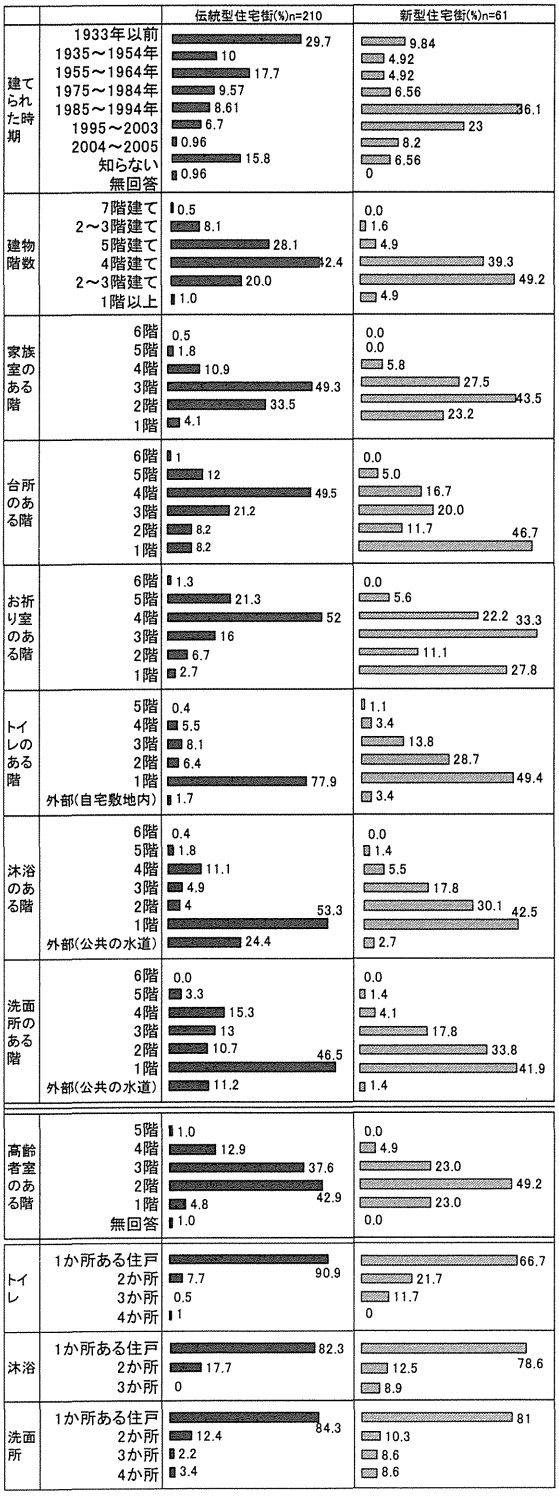


図 4-4　住宅構造の変化（調査Ⅲ）

表 4-5　住宅街別の住居特性（調査Ⅲ）



4割以上ある。また、1ヶ所だけが圧倒的(90%)な伝統型に対して新型では1ヶ所66%、2ヶ所22%、3ヶ所12%とその複数化がみられる。家族室としては、伝統型では2〜3階が通例(計83%)であるが、新型でも2階は4割強あるものの、1階が23%あることは新しい傾向といえる。台所・食事室では、伝統型では上部階の4階が最多で半数、3〜5階合わせて8割強であるのに、新型においては、伝統的慣習では通常配置しない1階に47%がある。お祈り室は浄空間の代表で、伝統型では4階が52%、4, 5階合わせて7割強であるが、新型においては上部階である3階が33%に対して、1階に28%あるのは家族室、台所・食事室の取られ方との連動といえそうである。水周り空間として、伝統型では、沐浴の半数が1階、外部の公共水場[注13)]24%、洗面所は1階(53%)と4階(屋上、15%)に分かれるが、新型では1, 2階が多く、階数の減少と設備の充実で、階の制約が少なくなっているといえよう。また、沐浴、洗面設備も複数化している。この傾向は洋風化の影響であり、寝室付帯のバスルーム(Attach Bathroom)によるものと見られる(表4-5)。

調査Ⅳでは新型の平屋の事例以外では、沐浴・洗面の水周りは1階以外にあり、台所は1階か2階にあり、伝統的空間構成とは大きく異なってきている。

3)高齢者室の位置と高齢者の移動

調査Ⅲでは高齢者室は伝統型では2階と3階になっているのが多いが、新型では2階が最も多く、その次に1階と3階になっている。高齢者室のある階から他の生活空間(台所、食事室、家族室、便所)までの移動の方法として伝統型のほうが階段の利用が多くなることがわかる(表4-5)。高齢者の移動を詳細に把握するため、伝統型と新型の4世帯の高齢者の移動をまとめると図4-5, 4-6のようになる。伝統型の高齢者は寝室から他の生活空間に行くたびに階段を利用するが、新型の場合は寝室と同じ階あるいは1階の差だけで生活ができている。事例16の場合はフラット式であるためほとんど同じ階で過ごしている。事例11と13は寝たきり状態だが、新型の方は便所が同じ階にあるため手助けをする家族などの動きが一層少なくなるといえる。事例3と18は夫婦とも高齢者であるが、伝統型の事例3では2階の寝室を中心に食事室の4階と1階の便所・外部へ移動しているに対して、新型の事例18では2階の寝室では寝る行為以外ほとんど1階で過ごしており移動は少ない。また、事例4の高齢者は6階建ての住宅で毎日階段による移動があるが、新型の事例20の高齢者は1・2階における移動となっている。

このように新型の住宅は下層の1・2階が広くとられ、主要な生活空間がこの範囲につくられるため、1〜4階までの伝統的空間構成の伝統型より高齢者および手助けをする家族などの移動が少ないといえる。

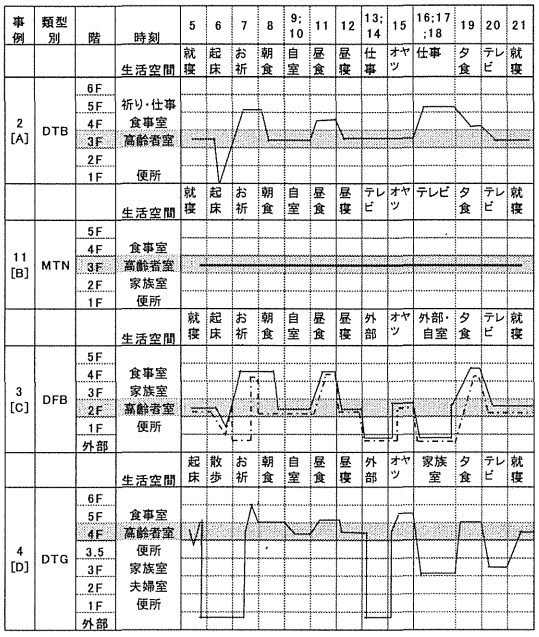


図4-5 伝統型の高齢者の移動(調査Ⅰ)

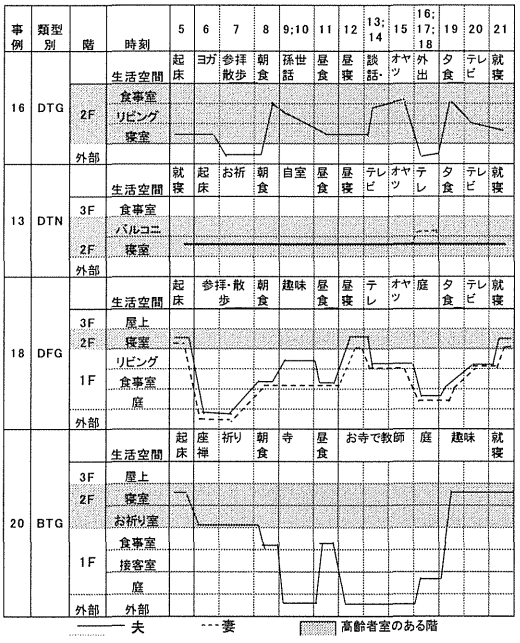


図4-6 新型の高齢者の移動(調査Ⅳ)

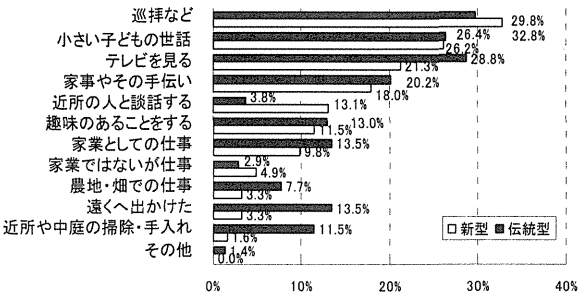


図4-7 昨日の過ごしぶり(調査Ⅲ)

4)一日の過ごし方からみるスピリツアルライフ

高齢者の一日の過ごし方を回答の明確性が得やすい「昨日」のケースについてアンケート調査で質問したところ、新

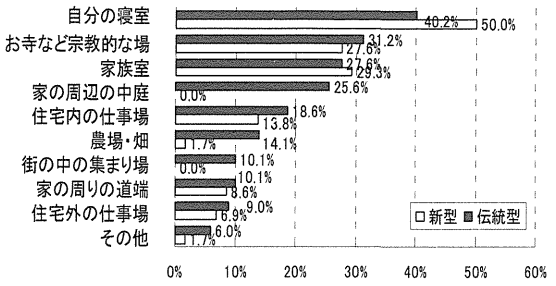


図 4-8　高齢者の居場所（調査Ⅲ）

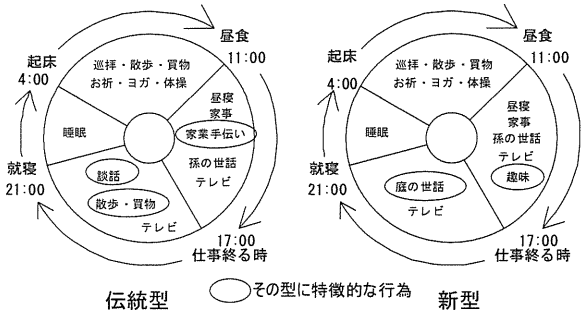


図 4-9　一日の過ごし方（調査Ⅳ）

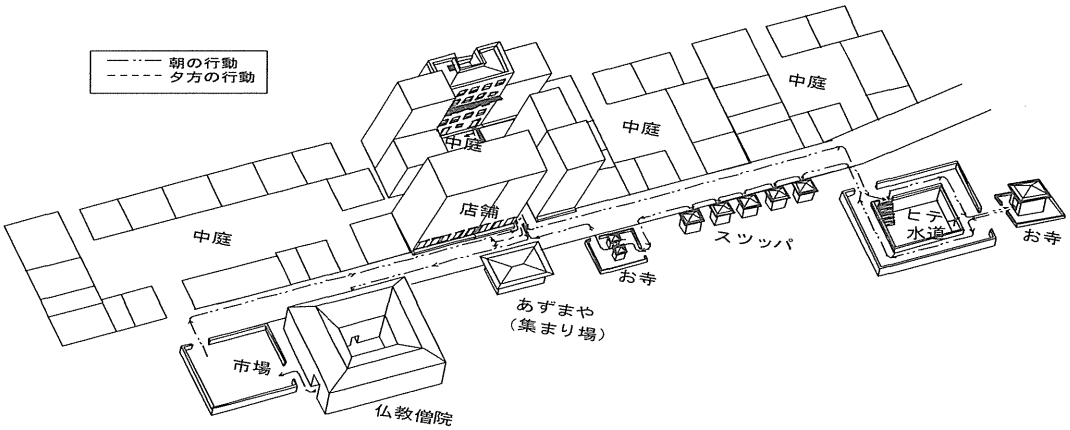


図 4-10　スピリチュアルライフの関係図（調査Ⅳ）

写真 4-1　市場

写真 4-2　仏教僧院

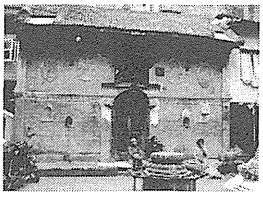


写真 4-3　中庭

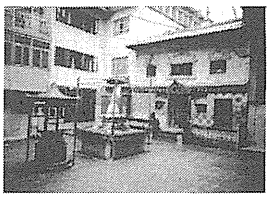


写真 4-4　中庭

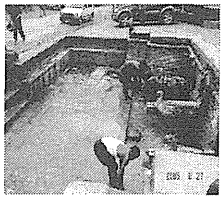


写真 4-5　ヒティ

型・伝統型いずれも「巡拝」[注14]と答えた高齢者が最も多く、その次に、伝統型では「小さい子どもの世話」、「テレビ」と続いているが、新型では2番目に「テレビ」となっている。また、家事やその手伝いをする高齢者も伝統型ではやや多く、「家業ではない仕事」、「農地・畑の仕事」をしている高齢者も多い。伝統型では仕事を続けている高齢者がやや多いと思われる。また、「近所の人と談話して過ごす」は伝統型より新型の割合が少ない（図 4-7）。さらに、主に過ごす場所としては、新型では自室と答えたものが多く、その次にお寺や宗教的な場所、家族室となっている。また、住宅周辺の中庭や農地と答えた高齢者は新型ではとても少ない（図 4-8）。

調査Ⅳのヒアリングからも高齢者の過ごし方としては図 4-9 のような特徴がみられた。朝 4:00～5:00 時に起床し、午前中の主な過ごし方は巡拝・散歩・買物・お祈り・ヨガ・体操という活動的であった。朝食[注15]は 8:00～9:00 で、昼食は 11:00、オヤツは 15:00、夕食は 19:00～20:00 であった。午後は昼寝、孫の世話、家業、家事、テレビ、趣味となっており、自室や家族室で過ごすことが多い。また、夕方は談話、庭の世話、散歩、買物、外部で過ごすという暮らし方が見られる。夜はほとんどがテレビを見て過ごしており、午後 9～10 時には就寝している。このように朝早く起き、信仰的な行動から一日が始まっていること、昼は孫の世話や外部での談話をして過ごすということが特徴的であるといえる。図 4-10 は A さん（事例 6, DFG, 68 歳、女性）の外部での行動を表した図である。朝起きて近くの公共の水道ヒティに洗顔とお祈りのための水を汲みに行く。洗顔が終わると、ヒティと同じ領域の寺に参拝し、帰り道にあるスツッーパや寺にも参拝し、自宅に帰る。そして、自宅のお祈り室でお祈りをし、それを終えたら、歩いて 8 分程度のところにある別の寺に参拝に行く。そして、帰りは市場によって買い物をして帰る。また、人によっては参拝に行く前あるいは参拝からもどってからヨガや体操をする。このように一日の始まりは心をきれいにするためにお参りをして始めるという生活はまさにスピリチュアル的な生活だといえる。さらに、昼は家族及び孫と過ごし、夕方は同年齢の人々と談話しながら過ごすという一日は、宗教的な生活を日常の中に含みつつ、家族や地域のなかでの自分の役割の位置づけ、存在が認識できるというスピリチュアル・ヘルス[注16]な生活であるともいえよう。しかし、新型

では近くにヒティやお寺がないため自宅から遠い寺の参拝のみになる。そのため元気でない高齢者は毎日の参拝は困難となり、特別な日のみに参拝する傾向もみられる。また、日常的な生活行為でも談話する行為がなく、その代わりに庭の世話、趣味やテレビをみて過ごす時間が多く一人で過ごす時間が多くなっており、伝統型のようなスピリチュアルライフとは異なっているといえる。

4.5. 高齢者のコミュニティにおける交流の実態

高齢者は外出頻度が高く、それによって高齢者の地域コミュニティでの交流ができているといえる。アンケート調査の年齢別の外出頻度では、前期高齢者だけではなく 80 歳代までは外出する頻度が高いことが注目される(図 4-11)。また、「外出しない」が伝統型に比べ、新型では多く、さらに女性の方の割合が高い。伝統型に比べ、住宅周辺や街区に、中庭や広場などの交流ができるパブリックな空間が少なく、巡拝のお寺や市場のような空間も伝統型より遠く、外出しにくい環境になっているためと思われる。

外出の目的としては、巡拝と散歩がもっとも多かった(図 4-12)。買物、談話、祭りへ参加、親族の家の訪問などのために外出する高齢者は伝統型の方が多かった。これは伝統型には公共水場や巡拝のお寺など談話するスペース、広場などが身近にあるため、あまり元気ではなくても外出しやすい環境であるからと考えられる。

調査Ⅴにおいてのヒアリング調査からもこのことが明らかになった。街区で高齢者が集まる場所は主にあずまや(休憩所）や店舗の前である。伝統型住宅街イカチェでは主に 4 つの集まり場が見られた。その中でも高齢者が多く集まる場は集まり場２と集まり場３である。集まり場 2 と３において、ヒアリング調査を行い、その結果は表７の通りである。集まり場には近く住む高齢者が集まってくる。集まり場 2 では農業をする高齢者が多く見られ、夕方には野菜の販売も兼ねて談話している様子が見られる。また、女性の高齢者には編物をしながら談話する様子が見られる。集まり場 3 は店の前であり、店の付近に座って談話する様子が見られる。女性の高齢者の中には編物以外に参拝の時の線香（糸）作りの作業する人もいる。道路を歩く人々などを眺め、談話しながら過ごす。冬の場合は 11 時から日向ぼっこをするために集まり場に出る。このように外部の集まり場自体が高齢者の居場所である。高齢者に自宅外で過ごす理由について尋ねたところ、ほとんどの人が「自宅内だとすることがなく、一日が長く感じてしまう。外だといろんな話ができるし、道路の風景を見ているだけでも楽しい」という。また、多くの高齢者は母国語ネワール語を日常使っているため、テレビやラジオのネパール語には慣れていないこと、また、教育が低く、テレビやラジオの新番組はほとんどわからないこともあって、自宅内ではつまらなく感じてしまうのが理由である(表 4-6)。

しかしこのような外部での集まり場は新型にはなく、高齢者にとっては自宅以外の居場所がなくなっているといえる。

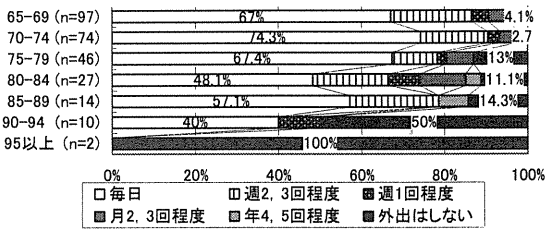


図 4-11　年齢別の外出頻度（調査Ⅲ）

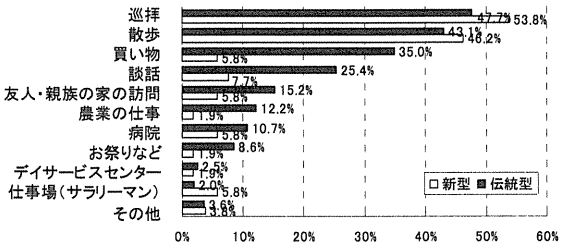


図4-12　外出目的・行き先（調査Ⅲ）

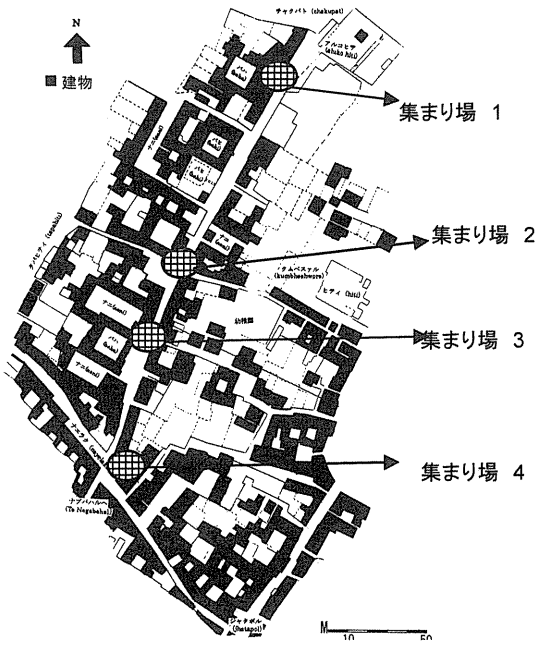


図 4-12　集まり場を示す図（調査Ⅴ）

写真 4-6　野菜販売を兼ねた談話

写真 4-7　夕方の集まり

4.6 生活全体に対する評価

生活全般満足に関しても満足およびやや満足と答えた高

齢者が圧倒的に多かった。また住宅街別では新型のほうが不満の程度がやや少なかった（図 4-12）。

5. 高齢者の介助・介護・援助・支援の需要

アンケート調査によると、高齢者が希望する介護者としては、「息子家族」が多いが、「娘」を望む人もかなりみられる。これは、街区内での結婚が多いネワール族の社会故に実際にも成立しうる特徴といえよう。（図 5-1）。

希望するサービスとしては、「医療サービスの充実」、「老人年金の充実」、「ホームヘルパーや介護者の提供」など、施設的なサービスよりも個人的あるいは、在宅支援の希望が多い。

ついで、高齢者における介助および介護課題の需要を把握するために、調査Ⅳの対象者のなかで、寝たきりの高齢者がいる家庭と対象街区にある女性団体に新たにヒアリング調査を行った。その結果、高齢者の介護の問題は，家庭内の問題であり、外に出すことは良くないという考えが現代のネワール社会の一般的な認識であることがわかった。また、誰が介護するのかは配偶者がいるかどうか、大家族の中での人間関係や息子の職業、未婚の娘の有無によって異なることが示されていた。介護はまず、配偶者（特に妻）が行い、ついで、未婚の娘、次に息子・結婚している娘・嫁の順となる。日本のように、嫁が全面的に担うというのではない。そして、３世代同居・大家族で人間関係が良好な場合には介助の手が多くなり、負担感は少ない。しかし、老いた配偶者や未婚の娘のみで、介護する場合には、負担感は大きく、健康を害する場合もでていた。とくに、伝統型で階段の昇降や排泄において、困難に直面している。この場合においても、オムツやリハビリ専門家の必要性など、個人的、医療面での支援がまず浮上し、バリアフリーなどの住居改善へ要求にまでは至っていない。これは、高齢者に配慮したバリアフリーの存在を知らないことや上述したように、家族による介護の手がまだ多く存在していること、この問題を家庭内の問題と捉えている意識のためと思われる。しかし、女性団体との会合の折にこれからの介護について話をきくと、認知症の高齢者の介護が大変だったことや自分の老後には家族ではなく、社会・施設でのサービスを期待する意見もだされ、潜在的には介護の社会化への要求は女性たち、若い人々の意識、暮らし方とともに生まれてきつつあるのではないかと思われる。

6. 都市発達と住宅建築の構法・住棟型の変化—日本と異なる課題の考察（調査Ⅵ）

6.1 農村を含めた原型住宅からの材料の近代化

カトマンズ平野周縁部をはじめとする、農村、山村部では、石のあるところは野石・切石の石造、石の少ないところは日干し煉瓦(乾燥土ブロック)造であって、いずれも小屋組みは木材で、屋根は草葺か水平木桟に土葺の平屋に始まっている。生産力向上、生活近代化にともなって、壁に焼成煉瓦、屋根に瓦を使いはじめ、２層、まれに３層にまで発達している。そのため、集落ごとに煉瓦焼成場ができていることもあり、のどかな田園風景までが煤煙によどむ傾向にある。屋根材の瓦、小屋組み・床組み・窓枠などが木造で、基礎・壁材の焼成煉瓦というのが第一段階の近代

表 4-6　高齢者の集まり場における交流実態（調査Ⅴ）

		性別	年齢	滞在時間	話内容	談話以外の作業	家からの距離
集まり場2	A	男	65	16～19	農業や談話	野菜販売	家の下
	B	女	62	16～19	農業や談話	野菜販売	家の下
	C	女	78	11～15	家庭の話	編物	西側の中庭
	D	女	74	16～18	家庭の話	編物	東側の中庭
	E	男	65	17～19	政治的、世間話	談話のみ	西側の中庭
	F	女	62	16～18	家庭の話	編物	西側の中庭
	G	男	72	16～19	農業や談話	談話のみ	家の下
	H	女	71	16～19	農業や談話	野菜販売	家の下
集まり場3	P	女	62	一日中	政治的、世間話	お店経営	西側中庭
	Q	女	86	11～17	家庭の話	談話のみ	東南の中庭
	R	男	72	16～19	農業や談話	談話のみ	東側中庭
	S	男	72	11～15	政治的、世間話	談話のみ	西側中庭
	T	男	68	17～19	政治的、世間話	談話のみ	家の下
	U	男	69	17～19	政治的、世間話	談話のみ	東側中庭

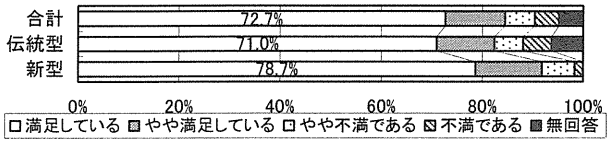


図 4-13　生活満足度（調査Ⅲ）

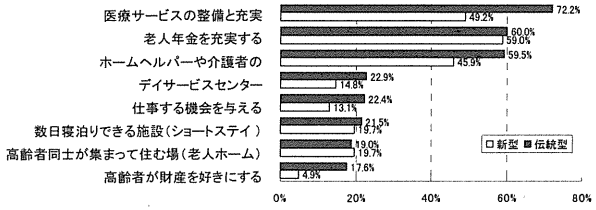


図 5-1 希望するサービス（調査Ⅲ）

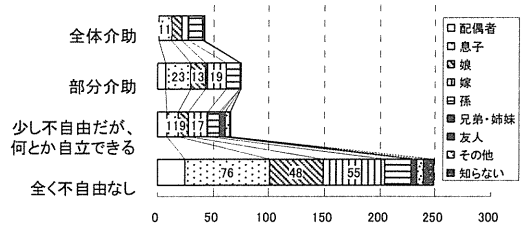


図 5-2　希望する介護者（調査Ⅲ）

表 5-1　ヒアリングによる介護実態（調査Ⅳ）

事例	類型別	性別	年齢	ADL	同居家族	主な介助者	現状	課題
5	DFN	男（女）	80（71）	寝（元）	7人	配偶者	・歩くときも介助が必要だが、排泄のため1階まで行っている。 ・高齢者の寝室がリビングでテレビ室もあるため、夫婦以外に家族の出入りも頻繁にある。	・便所が1階のため不便。 ・配偶者も病気がちな方なので、介助の負担が感じられる。
2	DTN	男	88	部	11人	嫁	・大家族で住んでおり、高齢者の介助も家族ぐるみでしている。 ・家族が仲良いため、問題なく高齢者の介助ができている。	・便所が1階のため不便。
11	MTN	男	94	寝	2人	娘	・娘一人で寝たきりの父の世話をしている。	・排泄問題。 ・オムツがないこと。 ・リハビリの専門家がないこと。 ・介助者が必要。
24	DFN	男（女）	73（70）	寝	6人	配偶者	・新型のフラット式住居に住む6人家族、介助は奥さんがしている	・リハビリの専門家がないこと。 ・デイサービスのような気分転換できる訓練場が必要。

化の様相である。

6.2 市街地の積層型連棟住宅の中庭を介する増殖

街路に沿って 2～3 層から始まり発達した市街地では、もともと石材でなく日干し煉瓦(乾燥土ブロック)から焼成煉瓦積みへと変わっている。組積壁と木軸の混構造を経て、煉瓦枠コンクリート詰めの柱に煉瓦壁を合わせる重層化(4～5 層)が進んだ。接道できない棟の増設のため、中庭を介した網目状の街区が発達している。所有地(敷地)の面一杯に垂直化する持家が連続する形であり、親族への垂直分割をともないながら、それぞれの内部空間規模不足を「屋上屋を重ねる」形で解決するため、稠密化の一途をたどっている。屋根は大てい屋上生活床となっている。

6.3 RC 構法の浸透と建築更新、住宅開発

現在、コンクリートの浸透が始まり、コンクリート軸組みに煉瓦壁、または一部配筋の CB(コンクリートブロック)モルタル仕上げ造が増え始めている。

建てこみ市街地の戸別更新のみでなく、市街地直近の辺縁部でも、狭小な道路や私道に接続した煉瓦造高層持家が増加する一方、本稿で新型住宅と位置づける庭付き RC 戸建地区にはじまり、まとまった農地を使った一体的建設の住宅地開発で、CB モルタル仕上げの連棟型分譲住宅、RC 造中層フラットなどが出現しつつある。

6.4 借家・貸室需要による変化

日本より遅く進行している近代都市化、経済成長期としての人口の都市流入による借家・貸室需要が増大して、旧型の積層型持家の上階は所有者の居住部としながら、下階部に借家人を同居させる例が増えている。また、市街地の住宅更新においても下階を貸室として当て込んだ建設も見られるようになっている。ここに、市街地の積層型持家の存在と都市型借家・貸室需要の今後の課題が想定される。

6.5 現代の高齢者居住空間としての日本との比較

ネパールの既成市街地の連棟街区にある狭小宅地の 4～6 階建の戸建持家が更新されるのは、戸別に厳しい階段昇降で垂直移動する狭小な居室群が再生産されることになる。市街地辺縁部における、本稿で新型住宅と位置づける庭付き戸建持家の低層住宅は日本の郊外住宅に準ずるものである。ここでは、高齢者の居住について日本とほぼ同様の課題がある。階段の手すり設置に、先々ホームエレベータ需要ということになるかもしれない。

最近の辺縁部の個別持家建設では、建込市街地ではないのに 4～6 階建の積層型も多くなっている。これは家族の空間ニーズの増大に対するだけでなく、借家・貸室需要を見込んだものもある。今は田畑とこれらの混在する景観があるが、やがて連担してスプロール市街地となる可能性がある。

一方では、辺縁部でもまとまった農地を転用する、専ら民間企業開発の住宅団地が出現しつつあり、日本でいう「テラスハウス」、「タウンハウス」群や、これにフラット(各層に住戸が数個づつはいったもの)の中層住宅を組み込んだところもある。階段室型ウォークアップ方式であり、日本の旧型中層棟の様相に似ている。ここでは高齢者居住においても日本と同様の課題がある。すでに日本で多くなった<エレベータ＋廊下>型のフラットは高齢者居住の垂直移動に一応の解決を見ているが、そこまでの発達は先のことと見られる。

最近のネパール建築分野の論調の中に、民間企業開発の住宅団地はその住戸密度の高いことと、守衛付ゲートと塀で囲い込まれた様子から“jail(拘置所)のようだ”という戯画も描かれている[注17]。それは、低所得者向けの公的な住宅供給の必要性の主張をともなうものであった。

6.6 構法・住棟形式からみる都市部の住宅類型

構法・住棟形式からみる都市部の住宅類型の現状を整理すると次のようになる。

①旧型の積層型混構造(煉瓦・木材・RC・CB)連棟住宅
②連棟の部分更新として再生産された積層型混構造住宅
③辺縁部の RC 主体の庭付き低層戸建住宅群
④辺縁部の積層型混構造庭なし住宅
⑤周辺部に開発された、RC・CB 構造の低層連続住宅のみ、あるいは中層フラット住棟を混合した住宅団地

公的住宅の政策的な供給が始まる時期が来れば、新たなプロトタイプが提示され、民間開発、個別建築更新の先導型が生まれるのではないかと考えられる。

7. 市街地及び住宅の現状におけるバリアフリー課題の考察（調査Ⅵ）

7.1 パタン市街地のバリアフリー化問題

パタン市街部の道路整備の現状はバリアフリー化検討という点では初期段階にある。旧来からの街区、道路事情に対するモータリゼーションへの対応は相当な後追い状態で

写真 6－1　2 階建て(テラスハウス)の外観

写真 6－2　フラット群の外観

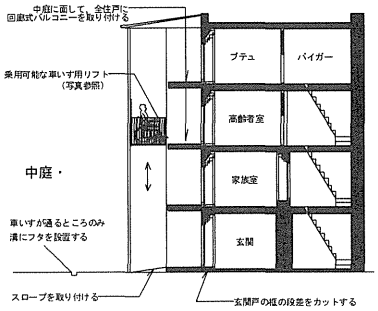


図 7-1　断面図

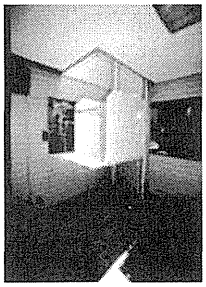


写真 7-1 簡易リフト

あり、幹線道路は辛うじて車の交通に支障がない程度の舗装がなされているが、一歩、脇道に入ると人と車がすれ違うことも困難なほどに狭いうえ、路面は凸凹状態である。道路からほとんどの建築物（ビルや住宅）へのアクセスには１～３段の段差があり、雨水の浸入対策とはなっても、車椅子や杖使用などの歩行困難者・高齢者にとって、いわんや、車いすの使用者のアクセスは難しい。

7.2 住宅街区内部のバリアフリー化問題

住宅（伝統型中庭式住居群）において、各住居及び居室への動線上には多くの段差が存在する。垂直に居住空間を増設してきたため、上下移動のための階段のためのスペースが制約され、高齢者や物を持った上下移動には厳しい寸法の階段にのみ頼っている。

7.3 バリアフリー化の施策具体化の手始め

政府の施策などがこのバリアフリー化まで行き届くには、かなりの年数を要すると推定される。しかし、先ずは、モータリゼーションに対応した人と車の交通条件を確保するだけの道路整備が当面の課題であるが、併せてバリアフリー化も一体として取り組むことが必要である。

第１には、経済的にも技術的にも取り組みやすい手すりやスロープを、可能な道路と建築物の段差に設置してゆく。特に住宅群を優先的に進める必要がある。

第２に、伝統型中庭式住居群の中庭の雨水用ピットには車椅子も通りやすく蓋を取り付け、少しの段差部分は小さなスロープを設置する。また、中庭から各住居の玄関に至る段差（約１０cm 前後程度）はミニスロープを設置する。

第３は、ネワール住宅の特徴である各階用途別縦型利用様式（４～５階建て）のバリアフリー化の方法として、高齢者の居室となっている２階、ないしは３階に中庭に面して各住戸共用の開放廊下を設置し車椅子が乗用できる“簡易リフト”（写真 7-1）を設置する。

高齢者・障害者の住宅内での移動と社会参加の条件の低下傾向を阻止するためには、ネパール市街地の特性に合わせたバリアフリー化の知恵を生み出すことが求められる。

8. まとめ

本研究より以下のことが明らかになった。

1)高齢者世帯の多くが息子家族と３世代同居し、例外的に親戚家族と同居する。また、別居は１割で、夫婦と単身の場合が半々である。また、同居でも、食事分離の形態も見られ始めている。新旧住宅街での差異はほとんどない。

2)新型住宅街が都市化の結果であることもあり、室配置などでは伝統型住宅とはかなり異なる。便所を各階に設け、台所を１階に設ける、寝室・接客室も１階に設けるなど従来の不浄とされた１階が生活空間に使われるようになっている。伝統的住宅が１階の外が中庭、路地などの公的空間なのに比べ、囲まれた個人の敷地(庭)があることで、１階の部分も生活空間化しやすいものとみられる。

3) 新型の方は旧型の細い立上り型プランなのに比べ、各階平面が広く取れ、生活空間が水平に配置されやすく、弱体化して行く高齢者にとって、移動には有利である。

4) 新型では敷地の区分・独立性が強いため、伝統型のようにパブリックな空間となる中庭、路地、集まり所などが隣接・近接しなくなるという形態的特性があり、近所の人々との談話が減り、伝統型より、近隣交流の満足度がやや低くなることに反映していると見られる。

5)高齢者の過ごし方には、朝の巡拝、散歩、買物という外出する行動が見られ、また、日常的に孫の世話をするという大家族ならではの世代間のふれあいもある点、スピリチュアル・ヘルスな生活となっており、大まかには新旧住宅型とも変わりがない。また、伝統型には町中には高齢者の交流が得やすい多くの集まり場が存在し、居場所となっている。新型では伝統型よりも、中庭、農場・畑、街中の集まり場が少なくなって、高齢者たちは住宅内にいることが多い傾向にある。

6)経済サポート、介護サポートは全面的に息子家族によるが、カースト制度により街区内での結婚が多く、結婚後の娘からのサポートがあることも特徴的である。新旧住宅型で、大きく差が見られない。

7)希望するサービスには「医療サービスの充実」、「ホームヘルパーや介護者の提供」、「老人年金の充実」など施設的なサービスよりも個人的あるいは在宅支援の希望が多い。新旧住宅別では差違がみられ、新型住宅が一定の経済条件の上位を意味することもあり、全般的に、要求水準に控えめなようすが見受けられる。

8)生活満足度については、不満と答えた高齢者は意外に少ない。高齢者を配慮した住環境の水準(バリアフリー)の存在を知らないこと、また「高齢期になって家族から全面的にサポートを受け入れるのが当たり前」という旧来からの考えもあり、実際に３世代世帯で子家族が身近に居るためと思われる。

９）高齢者の介護については、多くの人々は、家庭内の問題だと意識しており、社会的な問題とは位置づけていない。しかし、認知症の介護にあたる女性や一人で親の介護にあたらねばならない人たちには、介護の支援を求める要求が潜在的には存在しており、介護に対する意識は徐々に変化しているようにみえる。

10)都市部の構法・住棟形式としては、次の５類型、①旧型の積層型混構造(煉瓦・木材・RC・CB)連棟住宅　②連棟の部分更新として再生産された積層型混構造住宅　③辺縁部の RC 主体の庭付き低層戸建住宅群　④辺縁部の積層型混構造庭なし住宅　⑤周辺部に開発された、RC・CB 構造の低層連続住宅のみ、あるいは中層フラット住棟を混合した住宅団地 に整理される。このうち、③、⑤については、高齢者居住について日本と同じ課題がある

が、①、②、④のタイプについては、日本とは異なる課題をもつ。

11)市街地の道路整備の現状は、バリアフリー化検討という点では、初期段階にある。また、伝統型街区における積層型住宅においては多くの段差が存在する。垂直に居住空間を増設してきたため、上下移動のための階段のためのスペースが制約され、高齢者や物を持った上下移動には厳しい寸法の階段にのみ頼っている。こうした特性を持つ空間においては、その特性に合わせたバリアフリー化の知恵と技術が求められてくる。

＜注＞

1) Nepal Participatory Action Network の略。住民自身の参加で地域発達ために活動している非政府組織。1995 年 1 月に設立。

2) Helpage Nepal の略.世界 80 国で高齢者生活援助のために活躍している非政府組織 Helpage International の支部。

3) Child and Women Development Center の略。児童、女性、高齢者を対象に様々な活動をしている非政府組織。1996 年設立。

4) United Nations Economic and Social Commission for Asia and the Pacific の略。

5)本研究助成期間中の調査は調査Ⅲ～調査Ⅵまでであるが、研究の理解を容易にするために、調査Ⅰと調査Ⅱについても部分的に本文中に含まれている。

6)当初は Rs.100(160 円)を給付されていたが、最近は Rs175 になっている。また、夫を亡くした 60 歳以上の女性に対しても Rs150 を給付している。

7)1997 年の5ヵ年計画の主な内容は、高齢者データの更新、補助金の受け取りのための住民票の調査、病院に老人病棟・スタッフを提供、医療費の割引、交通機関での特別な整備および割引、高齢者の知恵や経験を生かせる事業の展開、都市部では老人ホーム、農村部では老人クラブの設立であった。しかし、これらは実行できず、2003 年の第 10 回社会サービスと保障5ヵ年計画(2003～2007)に同じ内容が含まれ、加えて、デイケアセンターの設立、5 つの発展地域にモデル老人ホームの設立、高齢者の保障、適切な仕事など NGO や地域組合の協力で行うことが含まれた。

8) 国際会議:Macau-Plan of Action on Aging1999 の計画ワークショップ、および Macau-Plan of Action on Aging2001(フィリピン)、Second Asian Regional Meeting 2001(インド)。

9) カトマンズ盆地には歴史的にカトマンズ、パタン、バクタプールという 3 つのまちが発達していたが、カトマンズも、それに隣接したパタンも、その後のスプロール等で広がっている。パタンと周りを含んだ地域においては、歴史的建造物の集積した旧市街とすぐ辺縁までをパタンとよび、行政的には Lalitpur 市 (Lalitpur Sub-Metropolis)とよぶ。Lalitpur 市は 22 の地区に細分され番号が付けられている。本研究で調査対象にしている第 22 地区(Ward no.22)はおおむねパタンに属している。なお、Lalitpur 郡(Lalitpur District)の 3 分の1(Lalitpur 市と他の複数の農村地域が含む)はカトマンズ盆地内に属し、3 分の 2 は盆地外に属する。

10) 高齢者の識字率が低いことと正確な解答を得るために面接方式を選択した。また、対象者に関しては、筆者が把握できる 22 地区のすべての高齢者を対象としている。

11) 1934年の大地震の災害を基準にしている。

12) 参考文献①, ②

13)ヒティと呼ばれ、古い街区ごとにつくられた水場で、水くみ、洗面、沐浴などに使われる複数の常流水栓がある場所。飲用としても使われている。

14) 毎朝、近隣の寺院や祠堂など数箇所を日課のように丁寧にお参りしていること、これは高齢者に限らず、若者も多い。

15) ネパールでは一日4食を食べる。朝食はパンと紅茶だけの軽いもので、オヤツにはチウラ(beating rice 米でできている)、おかず、紅茶を食べる。日本のオヤツより量が多い。

16)スピチュアル・ヘルスとは WHO の理事会が 1998 年に決議した健康の定義すなわち従来の 3 要素（身体的・心理的・社会的に良好な状態をさす）の中にあらたに加えられたもので、「霊性・宗教性・個人的信念」と説明されているが、心情に関する健康を意味し、感情、意志、気力といった機能につながると説明する研究者もいる。

17) Ar. Mahesh Shrestha,"Formal Housing in Kathmandu";Vastu vol 3, pp35-36.

＜引用文献＞

1) Nepal- Fact at a glance: Canadian International Development Agencyhttp://www.acdi-cida.gc.ca/cidaweb/webcountry.nsf/VLUDocEn/

2) H.M.G. of Nepal: Population Monograph of Nepal Volumn1&2, National Planning Commission Secretariat, Central Bureau of Statistics, Kathmandu, 2003.

3) NEPAN: Elderly Voice, Participatory Research Report, Kathmandu 2001.

4) CWDC: Older People in Transition, Case Studies from Selected Urban Areas of Lalitpur Sub Metropolis, Elderly People Sharing &Caring Project, Lalitpur, 2003.

5) Rafiqul Huda Chaudhury: Ageing in Nepal, Asia-Pacific Population Journal, 4.2004.

6) 黒川賢一、布野修司、モハン パント、横井健、ネワール集落の空間構成に関する研究、ハディガオン（カトマンズ、ネパール）の空間構成　その２(住居、ダルマサール、辻と住区構成)、建築学会計画系論文集　NO. 525　P. 191-199 1999. 11.

7) NEPAN: Towards Secure Ageing, proceedings of the National Preparation for the Second World Assembly on Ageing, Nepal Participatory Action Network, Kathmandu 2002.

8) Sudip P. Bhattarai: The Status of Elderly in Nepal, Shradhaa - Suman Smarikaa 2003 pg 44-48, H.M.G. of Nepal, MWCSW, Singhadurbar, Kathmandu, Nepal.

＜参考文献＞

①サキャ ラタ、藤本尚久、ネパール都市住宅街区における高齢者居住空間の実態に関する研究、日本建築学会九州支部研究報告集(建築計画系)第 43 号 pp149-152, 2004.3.

②サキャ ラタ、藤本尚久、上野勝代、ネパール都市型住宅における高齢者居住空間に関する研究、日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2 , pp87-88, 2004.8.

③サキャ ラタ、上野勝代、藤本尚久、ネパールの都市部における高齢者の居住空間のあり方に関する研究　その1(ネパールの人口高齢化前段階における高齢者事情と高齢者政策)、日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2,pp.45-46, 2005.9.

④サキャ ラタ、上野勝代、藤本尚久、ネパールの都市部における高齢者の居住空間のあり方に関する研究　その 2(パタン市第 2 地区新旧住宅街における高齢者の居住条件の実態と評価意識)、日本建築学会近畿支部研究報告集、第 46 号、pp113-116, 2006.6.

⑤ サキャ ラタ、上野勝代、藤本尚久、ネパールの都市部における高齢者の居住空間のあり方に関する研究　その３(パタン市第 22 地区新旧住宅街におけるアンケート調査による近所づきあいと外出行動について)、 日本建築学会大会学術講演梗概集 2006. 9.

⑥Wolfgang Korn "Traditional Architecture of the Kathmandu Valley" Ratna Pustak Bhandar, Kathmandu, NEPAL1986.

⑦ Arjun Raj Shrestha, "A Study on Socio-Cultural Aspects of Neighborhoods in urban settlements of Kathmandu Valley", Tribhuvan University, Dep. Of Urban Planning, M.Sc.thesis., 2004.

⑧Guide pamphlet of SLTD(Shelter & Local Technology Development) Centre 1996.

＜謝辞＞本調査にあたって居住者の方々、面接調査の調査員(Alok Library の会員の高校生や大学生 16 人）の方々に多大な協力を頂きました。記して謝意を表します。